

御忌会 ぎよきえ

(二月二十五日、法然上人のご命日に際しそのご遺徳をたたえる法会)

法然上人

浄土宗の宗祖。美作(岡山県)の人。押領使、漆間時国の子で、幼名を勢至丸といった。

九歳のとき父が夜討ちに遭うが、遺戒により仇討ちを断念。

十三歳で比叡山に登る。十八歳のとき黒谷に隠棲していた叡空を訪ねて弟子となり、「法然坊源空」と名を改める。その後研鑽を積み、四十三歳のときに善導大師の「一心専念弥陀名号」の文により心眼を開き、専修念仏に帰す。

比叡山を下りたのち京都東山に住し、浄土の教えを説いた。貴賤男女を問わず法然上人の教えに帰するもの多く、これに対して比叡山、興福寺などが強く抗議。朝廷もこれを受け一時流罪となる。

建暦元年、京都に戻るもやがて病床に就かれ、翌建暦二年(一二二二年)一月二十五日、八十歳で示寂される。

「本師源空は仏教を明らかにして、善悪の凡夫人を憐愍す。」(親鸞)

「伝え聞く、法然生き如来。蓮華上品に安座し、尼入道の無智のともがらに同じくす。一枚起請、もっとも奇なるかな。」(一休)

私たちの問いに対する法然上人のお答え

自分は未熟な人間ですが、仏道を歩むことができますか。

「このごろの我らは、智慧の眼しい、行法の足萎えたる輩なり。聖道難行の陰しき道には、惣じて望みを断つべし。ただ弥陀の本願の船に乗りて生死の海を渡り、極楽の岸に着くべきなり。」(後篇 第一)

勉強、坐禅、巡礼、祈禱など色々な修行がありますが、どのように取り組めば良いのでしょうか。

「智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし。」(『一枚起請文』)

念仏は法然上人が考えられた修行法ですか。

「諸行の中に念仏を用うるは、かの仏の本願なるゆえなり。」(前篇 第十)

病気で悩んでいます。宗教で救われるでしょうか。

「祈るによりて病も止み、命も延ぶる事あらば、誰かは一人として病み、死ぬる人あらん。

仏の御力は、念仏を信ずる者をば、転重軽受と云いて、宿業限りありて重く受くべき病を軽く受けさせ給う。況や非業を払い給わんこと、ましまさざらんや。」(後篇 第二十七)

死を恐れています。

「まめやかに往生の志ありて、弥陀の本願を疑わずして、念仏申さん人は、臨終のわるき事は、大方は候うまじきなり。

ただの時によくよく申しおきたる念仏によりて、臨終に必ず仏は来迎し給うべし。仏の来迎し給うを見たてまつりて、行者、正念に住す。」(後篇 第二十三)

亡くなった人にもう一度会いたい。

「会者定離は常の習い、今始めたるにあらず。何ぞ深く嘆かんや。宿縁空しからずば同一蓮に坐せん。浄土の再会、甚だ近きにあり。今の別れは暫くの悲しみ、春の夜の夢のごとし。」(後篇 第二十九)

亡くなった人が、苦しんだり迷ったりしていませんか。

「亡き人のために念仏を廻向し候えば、阿弥陀仏、光を放ちて地獄・餓鬼・畜生を照らし給い候えば、この三悪道に沈みて苦を受くる者、その苦しみ休まりて、命終わりにて後、解脱すべきにて候。」(後篇 第三十)